

## 弓道部より

森脇郁美

由來日本民族は一つの技術を習得するに當つても、其の單なる技術の熟練巧緻のみにて満足出來ず、必ず之に形而上的價值を賦與して、更により高き境地を開拓し究極に於ては自己完成を目指してゐる。太古人類經濟生活初期の段階にては、狩獵の利器として使用されてゐた弓が、一轉して鬪争の武器となり、再轉して鍊成の器となつた。大和・奈良・平安・鎌倉・吉野諸時代を以て我國に於ける弓の實戰的發展期は一應終止符を打ち、東亞綜合文化の一の顯現とも見得る東山文化を産んだ室町時代に至つて射も道としての形態を具へ、爾來大和島根て獨目の風土環境に育まれて國風文化的發展を遂げ、我等の祖先、又今日迄其の衣鉢を傳へ來つたものである。かかる見地より長谷川如是閑も言つて居る如く弓道は全く一の日本的の文化的表現である。射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。の射の精神は儒教と等しく、支那に生れて日本に生きた。封建的色彩を意識的。無意識的に拂拭した明治時代は舊時代の遺物然たる諸武術を大亂脈に陥れたが、世界的日本より日本の世界へとイデオロギイが變化し日本の自覺の覺醒が漸次要望される

と共に又隆盛の氣運に逢著した。更に最近國防能力増強に結び着いて、所謂武道が驥足を展ばし來つた盛況は盡し刮目に値するものが有る。然し乍ら之等隆昌の諸武道中に伍して、獨り我が弓道のみが遺憾な地位を占め來つた事は否み難い駭たる事實である。現に「弓道は武道なりや」との非常識極まる論議が、よし一部の門外漢の間にもせよ、交はされてゐる事は其の証左とも見れば見られよう。我々はかかる實狀を率直に龍南人士に表明するに毫も吝な者では無い積である。

世人或は弓道を以て非實戰的なる保存武道なりとし、婦女子の爲事なりと誤解してゐる向が有る。之は何れも武道を以て、單に四肢を動かして事足れりとなし、武道は決して鬪争の爲の直接手段としてのみ存在するものではないといふ事を理解せざる妄言である。小笠原流齊藤氏は其の弓道論中に説く「血河屍山の間にたち泰然として其任に耐へる如き點に至つたならば、その劍たると柔たると弓たると薙刀たるとを問はず、苟くも武道を修めた者に長短のあらう筈はない。」と。又五高弓道部の前師範金子先生は次の様に教へられて居る。「邪念邪想を去り無我の境地に入り、一筋の矢に已れの全生命を托し其の至るを待つ會の味こそ、一意何時なりともお召しに應ずる覺悟の心境と異ならないのである。」之を要するに弓道修行の眞諦は境涯を練るに在

る。進退周還必ず禮に中る禮儀作法の訓練・諸を正鵠に失すれば反りて諸を其身に求むる反省的努力等弓道の持つ意義は色々あるとはいへ、弓道を修むる我々の目的とする所は境涯を練るに在りと斷言して憚らぬ。「境涯を練る」それは決して精神肉体を二元的として爲しおぼせる業ではない。我々のよく言ひ又言はれる「熱のエネルギーを力のエネルギーに變ずる」底の心身一如の心構へを以て始めて爲し得るものと言へよう。弓道を評して「靜中動有り」と稱するが、弓道を目して單なる婦女子の戯となす連中は、果して弓道の動的面を洞察して、而も敢てかかる言辭を弄するのであらうか。カントは自己完成を以て人の目的にして且つ義務なりとし、其は自然より受くる賜物にあらずして人の能力Kraft又は自然の素質Katzenbeisser, Krüderの陶冶に外ならずとてゐる。之は日本の道の理念に立脚した行的修練に一脈の繋りを有し、同時に弓道理念にも一脈の繋りを有して居ると思ふ。

然し乍ら我々が龍南人士に眞の理解認識を求めんとするのは「五高弓」と敢て標榜する五高弓道部の弓道である。今試に弓道部の前身弓術部の歴史を緋いて見ると、上田沙丹氏の「龍南物語」に次の様な小話が載録されてゐる。「弓術部は地味な役である。その道の人でなくては忘れ勝ちである。生徒集會所の往きがてに敬意を表して弓術場を訪づれ

ると、田舎の豊年祭りの芝居小屋の便所位の古い建物が榮養不良の兒を思はせて涙を誘ふ。夏の頃には飛び込んで来た種子の太つたのだらう、雛芥子の花が咲いてゐることもあり、火のやうな花の色が更に物寂しい思ひをさせる。」沙丹氏の輕妙な筆致にも滲み出てゐる先人の精進の姿に我々はただ頭が下るのであるが、「弓は満月白草原矢風流るる月見草」——五高弓道部四十年の、時流をよそに世評をよそに月見草亂れ咲く白草原での「鳴かず飛ばず」の眞摯なる努力は、五高弓道部が今や「蠶虫始飛」ともいふべき一大發展期に逢著するに當り、正に實を結ばんとしてゐるのである。萬丈の氣を吐く我が弓道部は、一昨年以來絶對不敗の一大金字塔を打ち建て又現に打ち建てつづけてゐる。聯盟戦にあれ、四高戦にあれ、インターハイにあれ、連戦連勝、馬や觸るれば馬を斬り、人や觸るれば人を斬るとは正に我々弓道部員の昂然たる意氣を示すものに非ずして何であらうか。不敗の五高弓の眞價、それは遂に一行手は萬里雲湧きて雄圖も燃ゆる天つ日や」と嘯く薩南健兒をして「傳統強し恐るべし」との喰りを發せしめた。嘗て其の存在、集會所にだに劣つた五高弓道場の古びた建物は今や後光を放つてゐる。

我部をして、過去現在に於て斯くも光彩陸離たらしめ、未來に於ても其名聲を維持して行かしめる可能性の根基は

實に我部の二大特色たる傳統と、後、我に求められると云ふも決して過言ではなからう。或は何等の傳統なく獨善的行爲を以て創造てふ自己陶醉に陥つて居るが如き、或は輝しき傳統はあれども徒に過去の幻影の追求に愉悅を貪つて居るが如きではない。我々には五高史にも比肩し得る程の四十年の傳統が有り、而も我々に在つては、傳統は過去の遺物たるを意味せず、傳統は不斷に我々の現在に生かされてゐる。即ち我々弓道部員は傳統を持たざるに非ず、それに引摺らるるに非ず、先輩と我々例へるなら珠數の如き繋りあり傳統は我々の中に脈々として波打つてゐる。我々の自ら矜持とするのは、我々のたゆみなき没我を以ての精進である。引合に出す様で甚だ恐れ入るが、世界に冠絶する我が無敵海軍の訓練が月月火水木金金だとよく云はれる、我々弓道部員の意氣込もそれに近い。先輩の植ゑてゆかれた櫻樹が爛漫の春を迎へて矢場に花吹雪を舞ひ降らせる春の日も、沛然白を跳らす梅雨の日も、颯々たる松籟に蟬時雨の打ち交る夏の日も、蒼穹に弦の音牙え渡る秋の日も、將又白草原に霜柱たつ冬の日も、矢取りの聲は白草原の幽邃境裡に震撼する。

我々は若さを失つてはならぬ。感激性と知性、それは背馳するものであらうか。我々は試合成績不調の現實を前にして、今更試合に勝つばかりが能ではない等といふ觀念論

的臭氣芬芳たる批判めいた感激性の乏しい素直ならざる態度を執りたくはない。本末を誤つてはならぬ。部生活を全然試合の手段化するの弊は勿論論を俟たぬが、充實せる部生活の眞髓が偶々發揮すべきの時機に逢著して發露となつて勝利の結果とするならば、我等は其の勝利に溫い賞揚を與ふべきでこそあれ、之に冷い批判を浴せかける必要は毫もないのではなからうか。我々は、部生活逃避の隱家を時流や學問等に求めんとするが如き、卑劣なる陋劣極まる凡そ剛毅朴訥の眞精神とは似ても似つかぬ態度は執り度くはない。

我々五高弓道部員にして眞個の弓道人を以て自ら任じてたつ者は、決して神聖なる弓道を皆部制度のおためごかしにおざなりに修めてゐる者ではなく、弓道部生活を永き一生の繋りに於て見んとする者である。うたかたの世の常人の見る如く我々は狭い弓道場に踞踏して居る者ではない。我々の祖先は有限の中に無限を透視達觀する術を我々に教へて呉れた。弓道場は成程無限には廣くはない。然し其處には先輩の遺芳がただよひ、其處は我々が境涯を練る場處であり、又我々は其處に於て踞踏するどころか實に我々は其處に於てこそ天地と感應道交するのである。

弓道はかながらなり一本の

矢を引くときも神に歸一す

(終り)